

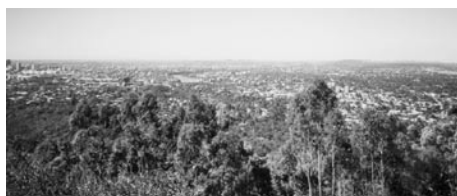
一枚の地図から—オーストラリアのワイン事情

福岡県立京都高等学校定時制 豊原守良

地図との出会い

オーストラリア・クインズランド州・ブリズベン。ブリズベン川に沿った市の中心部、トレジャーリーカジノの前に地図の専門店がある。1999年3月に1枚の地図を見つけた。オーストラリアのワイン地図で、オーストラリア全域のおもなワイナリーを網羅しており、しかも代表的な地域については気候風土から地域の詳細な地図まで載っている素晴らしいものであった。

2002年7月。地図を見つけてから3年後、姉妹校との交流のために4度目の引率でブリズベンを訪れた。



Mt.クーサからのブリズベン

同じ書店の同じ場所にその地図はあった。スコットランドでウイスキー蒸留所を訪ねたことはあったが、ワイナリーを訪ねたことはなかった。私はこの亜熱帯性気候のクインズランド州にもワインの産地があったことに少なからず驚きを感じた。ブリズベンから南西に約250km。この一帯がグラナイトベルトという地域で、比較的規模の大きいワインの産地としてはオーストラリアで最も北にあることがわかった。

グラナイトベルトへ

道路地図を頼りに早朝ブリズベンを出発した。ブリズベンからは自動車専用道路を西に進んだ。オーストラリアでは一般道路も郊外での制限スピードは時速100kmで、自動車専用道路も同じ時速100kmである。車はイプスウィッチで自動車専



センターピボットの灌漑

用道路を降りた。

イプスウィッチからは広いオーストラリアを体験することになった。小さな町

を出るとすぐに広大な畑や牧場が広がり、所々ではセンターピボット方式の灌漑設備が整った広大な畑が見られた。

遠くに侵食から取り残された丘陵を見ながら、いよいよ「大ディヴァイディング山脈」である。古期造山帯の例として授業中に何度となく口にした、南北3500kmに及ぶ「大」山脈越えだ。思わずハンドルを握る手に力が入ったが、意外なほど楽に越えてしまった。この一帯が「メインレンジナショナルパーク」で、日本のように九十九折りのカーブではない。車内にいながら森林浴をしているかのように快適に車を走らせることができた。

山越えが終わると直にウォリックである。もうグラナイトベルトの北端まで来ている。ウォリックからはニューイングランドハイウェイ（といっても一般道路）を南下すること約30分で目的地のスタンソープ、グラナイトベルトの中心地である。この付近まで来ると、海拔高度は1000m前後はあるようだ。

まず「i」インフォメーションで地図をもらい、ワイナリーをいくつか紹介してもらった。

ほとんどのワイナリーは「i」から車で20分以内の場所にあり、現地地図もわかりやすく迷うことはなかった。さて、ワイナリーでの交渉は通常テイスティングから始まる。ワイナリーが持っている自慢の商品を、自分の鼻と口とで吟味し購入するのである。気に入らなければ当然買わなくてもよい。これが確実に浸透しているのである。一般的なテイスティングのルールは、まず香りを嗅ぎ、少量口に含み、飲み込まずに口の中を回し

て足下のバケツへ捨てる。

ところでここで気がついたのだが、ぶどう畑は棚作りであった。海外のぶどうの産地は多くが垣根作りである。私もてっきり垣根作りだろうと思っていたが意外であった。他にもこの州では棚作りのぶどう畑がしばしば見られた。一般的に気温

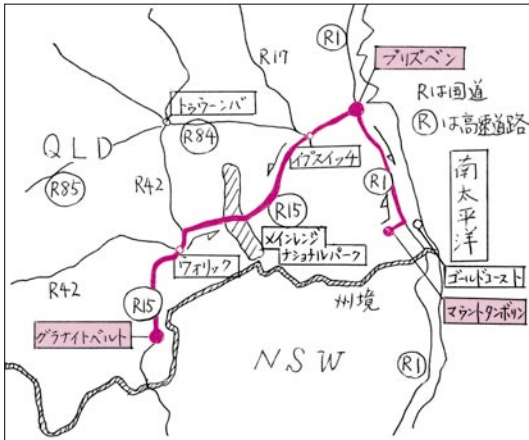


棚作りのぶどう畑

と湿度が高い地域では、強い陽差しを避けるために棚作りが多いが、気温が低くすべての房に十分な陽差しが

必要な所は垣根作りが適しているということだった。ここはブリズベンと比べると5℃前後気温が低く、降水量も700mm前後のようである。陽差しはかなり強いので、それぞれの経営者の判断で選択しているようだ。

ぶどうはほとんどがヨーロッパ系であるが、なかでも白ワインは「シャルドネ種」、赤ワインは「シラズ」種のものが好まれているようである。



ぶどう園の地図



iの裏の公園

復路のメインレナジナショナルパークでは、木々の間から夕日が射し込み、というよりも暗くなりかけた

樹林の中を切り裂いていくように夕日が突き抜け、遠くの丘の頂上付近を切り取るように赤く染めていた。

マウントタンボリンへ

翌日は朝から雲一つない青空の中を、ゴールドコースト近郊のマウントタンボリン山に出かけた。ブリズベンからは高速道路を使って約1時間30分の距離であるが、できれば一般道路の方が、途中の景色や雰囲気がよく実に楽しいドライブコースである。

さてマウントタンボリン山は避暑地のような雰囲気、メインストリートから車で3～4分の所にワイナリーが2軒ある。マウントタンボリンビンヤードと、セダークリークワイナリーである。マウントタンボリンビンヤードはおもに自家製のワインを販売しており、バラエティーに富んでいる。一方のセダークリークワイナリーは自家製というよりも実はグラナイトベルトの代表的なワイナリーから選んだワインの販売が主で、グラナイトベルトのワインはここでいろいろ購入できる。

こちらのワイナリーでは、日本人と見ると軽くて甘みのある白ワインを出して強く薦めることがある。日本人はそれを自分で確かめずに買うらしく、あとはあまり相手をしてくれない。サービス精神に欠けると憤慨する人もいるだろう。しかし、反対にこちらが目的を持って尋ねると実によく相手をしてくれる。最後になって、海外で私たち日本人がどのように思われているのか、その一端を垣間見たような気がした今回の旅行であった。



今回使った思い出の地図 バックに広げているのがオーストラリアワインマップ。左がグラナイトベルトワインマップ、上がオーストラリア道路地図。